

「必ず訪れる場所」。福島県という地名を見聞きする度、私はつぶやく。あの日から五年と半年が経ち、福島の今を伝えるメディアも少なくなってきた。そんな中、立命館大学校友会が主催する東北応援ツアーでは復興の進む今日の福島を見ることができると知った。秋が深まる十一月中旬、私は初めて福島の地を踏んだ。

県中部、浜通りに位置する浪江町。小高い丘の上から見渡す先には何もない。巨大な瓦礫焼却炉と穏やかな海が見えるだけだ。「ここら辺には家や店が立ち並んでいました」。副町長の言葉を聞いても信じられなかった。あの時、私が立っている丘のすぐ下まで津波が押し寄せてきたのだ。目を閉じてあの時の惨劇を想うことにした。広い海岸に鳥の鳴き声が響いていた。

「誰もいない」。現在でも避難指示が解除されていない浪江町の住宅街を歩いた時の感想だ。あの日あの時が来るまでは普通の生活があった場所。家具を持ち出して空っぽになった住宅が何軒も続き、自動車もホコリを被って停まっていた。道という道全てに除染された跡が残り、「除染完了」の立て看板が目立つ。テレビの音、自転車の走る音、人の話し声はどこからも聞こえない。ただ風が通り抜ける音だけが耳に残った。

県南部のいわき市はトマトの産地として名高い。我々は先端技術で震災を乗り越え、安定的なトマトの出荷を続けるあかい菜園様を訪問させて頂いた。あかい菜園様は自動車部品メーカーから出資を受けて誕生した新興のトマト生産者である。他の生産者に先んじて多品種なトマト栽培に乗り出しており、初めて目にするカラフルなトマトもあった。付加価値の高いトマトを安定的に生産し、地元・福島県を中心に出荷しているそうだ。現在、野菜生産メーカーに勤務する私にとっても、IT技術を駆使した人手のかからない栽培方法など低コストかつ高効率な「時代に挑戦する農業」は魅力的に感じた。

当ツアーでの宿泊場所は、映画「フラガール」の舞台でもあるスパリゾート・ハワイアンズだった。「炭鉱の町をハワイに」というかけ声のもとに誕生したハワイアンズは館内温度が28度に設定されおり、美しいヤシの木が生い茂った常夏のハワイを満喫できる。ふとパスポートを忘れたことに気付いたが、福島弁が可愛いバスガイドさんの「パスポートは必要ねえ」の一言にほっと胸をなでおろした。「福島の美味しい」が凝縮された夕食を頂いた後は、有名なフラガールショーを観賞した。ツアー参加者はこの二日間見せたこともない笑顔でショーに魅了されていた。もちろん私もその一人だ。

福島県という地名を見聞きする度、私はつぶやく。「再び必ず訪れる場所」と。